神の後継者の異世界記

colreonis

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

サードインパクトによって神となった少年、碇シンジは突如現れた創造神により創造神後継者に指名され、成長のため様々な世界を旅することになった。

その際に与えられた能力は規格外。

そんな能力のちょっとした操作ミスによって作られる（色んな意味での）滅茶苦茶ハーレム。

果たして、シンジはどんな世界でどんなトラブルを起こすのか?!

※アンチ・ヘイトは今のところ念のためです。

７／２３　Ｒ―１８な内容を含む話のタイトルに『★』を付けることにしました。

目次

シンジ、異世界へ ―――― 1
シンジ、説明す（ついでに童貞卒業!!）★ ―――― 13
シンジ、原因追及す★ ―――― 43
シンジ、調教す（前篇）★ ―――― 57

シンジ、異世界へ

紅・・・
それはこの世界に存在する唯一の色・・・・・・・・

紅・・・
それは僕の過去。犯してきた罪の色・・・・・・・・。

そして白・・・
それは僕に与えられた明日(きぼう)の色・・・・・・・・・。

新世紀エヴァンゲリオン
≪神の後継者の異世界記≫
ｃｏｌｒｅｏｎｉｓ作

プロローグ

２０１６年、世界は一部の死に恐怖する老人たちと、たった一人の愛する妻に再開することに

執着した一人の男によって滅亡した。

それぞれの思惑によってその人生を狂わされてマリオネットとなってしまった僕・・・『碇　シンジ』を除いて。

あの日起こったサードインパクトによってＬＣＬとなってしまった地球上の生命が持っていた知識は、ただ一人生き残ってしまったという現実に耐えられなくなってＬＣＬに還ろうと、その身を浮かべた僕の中に流れ込んできた。

身近な存在だったアスカや綾波、ミサトさんやリツコさんや父さん。それにトウジやケンスケ、洞木さんにクラスメートのみんな。そして全く知らない世界中の赤の他人の知識が僕というたった一人に流れ込んできたため、気絶して長い間ＬＣＬの海を漂うことになった。

どの位の間気絶していたのかはわからないけれど、気が付いた時には僕はどこかの砂浜に打ち上げられていた。

目を覚ましてから長いこと記憶の整理を行っていたら、とんでもないことが分かった。

どうやら僕は新たなアダム・・・新第1使徒とでも言うべき存在になってしまったようだ。

使徒たちが使っていた特殊能力その物の行使、応用、合成と様々な力を使えるようだ。

ある程度能力の確認を行った僕は、第3新東京市まで飛んでいくことにした。

上空から眺めて分かったけど、どうやら僕は芦ノ湖の湖畔にいたようだ。

そして、芦ノ湖の反対側の湖畔を見た時、僕は驚きで口を半開きにしたまましばらく呆然としてしまった。

第3新東京市のビル街は全て破壊され、地面に大きな穴をあけてジオフロント内が丸見え状態になっているのはまだ序の口で、そのジオフロント内に十字架のごとく突き刺さっている9体の量産型エヴァ。

そして、ネルフ本部のピラミッド上の建物の横に騎士の如く方膝をついて頭をたれている初号機の姿があった。

気を取り直した僕は、初号機の元まで下りて行った。
改めてみると、かなりボロボロだった。
拘束具兼装甲はあちこちがはじけ飛び、コアも露出していた。
僕はなんとなくコアに触れてみた。
その途端、初号機が震えだし、コアと両目に光がともりだした。そして・・・
「ウォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン」
天に向かって鬨の声を上げるように吠えた。

「・・・・・・急に吠えるな、ウルサイ」

その声は僕の後ろから上がった。
振り向いた先にいたのは、カヲル君を成長させたような容姿をした青年だった。
「あなたは一体…」
「俺か?俺は創造神だ。」

自分を創造神だと名乗るこの人からは、それを証明するかのように人ではありえない神々しいオーラが感じられた。
「・・・神様が一体何の用でこんなところに？」
そんな何気ない一言に、とんでもない答えが返ってきた。
「それは、お前を俺の後継者に指名するためだ。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい？」
「お前には、これからある物を取りに行ってもらった後、様々な世界に行ってもらう。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？」
創造神様が言ったことがうまく理解できない。
僕が、創造神様の後継者？・・・様々な世界に行く？・・・何の冗談でしょう？
「冗談などではない。お前には俺の跡を継いでもらうために様々な世界に行って経験を積んでもらわなければならない。これは決定事項なのだ。」
さすがは神様。極自然に思考を読んでる。
「・・・・・・・って、ちょっと待ってください!!どうして僕が選ばれたんですか?!」
「なんだ、気が付いていなかったのか？お前はサードインパクトの際に魂の階梯を何段も上ってこの星の神となったんだぞ？」
ぼ、僕が神様？創造神様が言うんだから間違いはないんだろうけど、全く実感がない。

「しかもだ。お前はＬＣＬの海に１００年もの間漂っていたことにより、更に階梯を上ってしまった。このままではお前の魂と精神のバランスが崩れてしまう。そうならないためにも、お前は経験を積まなければならない。それが終わった時にはお前は俺と同じ位階に至るだろう。」

創造神様の話はうまく理解できないままだけど、このままでは僕が僕でいられなくなるっていうのはなんとなくわかった。だから、僕の答えは決まっている。

「・・・わかりました。やらせてください。」

「・・・よし。それではこれからお前には長野県の九郎ヶ岳に行き、ある物を手に入れろ。」

「ある物ってなんなんですか？詳しく教えてください。」

「行けばわかる。あれはそういうものだ。」

行けばわかるって・・・無茶苦茶な。でも、やるって決めたんだ。

「わかりました。では、行ってきます。」

そして僕は長野県の九郎ヶ岳に向かった。

まずは１周してみようと山の麓側を飛んで回っていた時、人が２、３人は通れそうな洞窟があることに気付いた。

「・・・よし、まずはあそこから調べてみよう。」

何の手がかりもないから目についたあそこから探してみようという軽い気持ちでその洞窟に入っていった。

中は暗かったけれど、それなりの広さがあった。何枚もの石碑が立っていたけど、それらを無視して奥へ進んでいく。

僕の中の何かが、僕の体を奥へ奥へと誘っているようだ。進むごとに焦燥にも似た何かは強くなっていく。

そして、一番奥の部屋にたどり着いた時、僕の心臓が大きく鼓動した。

そこにあったのは蓋がずれて中があらわになった棺だった。

棺の中には今にも動き出しそうなミイラが一体、ベルトのようなものをつけて納められていた。

僕はミイラがつけているベルトのようなものに目を奪われて仕方なかった。

「・・・創造神様が言っていたのはこのことだったのかな?」

僕は創造神様の言葉を思い返しながら、そのベルトを手に取った。

その途端、ベルトの中央にはめ込まれた石が光り輝き、僕の脳裏に映像が流れた。

それはベルトを付けた赤い鎧の戦士が異形の化け物と闘う姿だった。

やがて、戦士はその鎧を青、緑、紫に変え、手に棒状のもの、銃に似た何か、剣を持って戦っていた。そして鎧の色が赤に戻ったと思ったら、今度は黒に変わってしまった。

今までの４つの姿よりも強そうだけれど、何か嫌なものを感じさせた。
黒い鎧の戦士が僕のほうに向かって右手を向けたところで映像は途切れた。
「・・・今のはこのベルトが?」
僕はベルトを右手に持ったまま洞窟を出ようとしたけれど、ミイラが収められていた棺の下から光が漏れていた。
気になった僕は棺をずらしてみた。
すると、そこから機械でできた大きなクワガタみたいなものがでてきて、僕の周りを飛び始めた。
「な、なんなんだよ、こいつは?」
とりあえず、何もしてこないので僕はこのメカクワガタもどきに注意を払いつつ洞窟から出ることにした。
「・・・いつまでついて来るんだ?」
結局、洞窟からでてからもメカクワガタもどきは僕の後について来て、第３新東京市まで来てしまった。
「ほう、ゴウラムまで見つけたのか。」
「・・・ゴウラム?」
「そいつのことだ。」

創造神様はこのメカクワガタもどきを知っていたのか。
「さて、これからお前に４つだけ特典を与えてやろう。能力、知識、道具など何でも構わない。」
「・・・本当に何でもいいんですか？」
「あぁ、勿論だ。」
僕の好きなように選んでいいのなら・・・・・・
「じゃぁ、１つめはこのベルトとゴウラムに関する全ての知識と必要な技能とかをください。」
「いいぞ、ほれ。」
創造神様は右手を上に向けて光の球を作り出したかと思うと、それを無造作に僕に向けて放った。
そして、僕がそれに反応する前に光の球は僕の体に吸収され、僕の願い通りの知識を与えてくれた。
「・・・成程、これはそういうものだったんですね。」
僕は与えられた知識通りにベルト――アークルを腰に巻いた。
すると、アークルは僕の体の中に吸い込まれていった。
「さて、残りはどうする？」

創造神様に促されて、残り3つの特典についてを考える。
身体能力に関しては使徒として覚醒した時から既に超人並みだったから、それほど必要とはしないけれど、リミッターみたいなものはほしい。それに、今得た知識から考えると残りの願いももう決まったかな。
「残りの特典は『僕に関する全ての事柄をステータス操作で変更できる能力』と、『僕が考えたものを瞬時に作り出せる能力』、そして『仲間と一緒に世界を渡る能力』でお願いします。」
「ほう、なかなか面白そうなものを選んだな。」
創造神様はまた同じように光の球を作り出して僕へと放った。
今度は自分から光の球を受け入れた僕は、ゴウラムと初号機に向き直った。
「さて、君たちも僕と一緒に来てくれるかい?」
僕の問いかけに、ゴウラムは僕の周りをブンブン飛び回って答え、初号機は静かに頷いてくれた。さっき創造神様にウルサイって怒られたのが怖かったのかな。
まぁ、いいか。まずは初号機をどうにかしなきゃね。
「初号機はそのままじゃまずいから新しい体をあげるね。」
僕は飛び上がって初号機のコアに触れて体を人間として再構築しようとしたところで、止まってしまった。

「・・・まさか、母さん？」
初号機のコアからは初号機以外の魂が感じられた。
だから僕は、元々の予定通りに初号機の体を人間として再構築するとともにコピーして、
母さんの魂をそっちに移すことにした。
初号機が光とともに小さくなり、拘束具が辺りに落ちていく。
そして光が消えると、その場には裸の女性２人が立っていた。
一人目は僕の母さん、碇ユイ。初号機に取り込まれた当時（多分２５、６歳くらい）のままだ。
二人目は初号機。ただ、どことなく母さんに似ている。やっぱり、ずっとコアの中にいたから、その情報が強かったのかな。
でも、初号機のほうがスタイルはかなり良いけど。
「久しぶりね、シンジ。見ない内に大分変わってしまったようだけど。」
そう言ってほほ笑む母さん。そして・・・
「こうやって話すのは初めてですね、マスター。これからもよろしくお願いします。」
「よ、よろしくね。」
声まで母さんに似てたよ。これはかなり母さんの影響を受けてるな。

「さて、準備も整ったようだし、早速行ってもらおう。このゲートを通ってくれれば、最初の世界に行ける。そのあとはある程度の年月をその世界で過ごしていれば、次の世界へのゲートが開くようになっている。」

「その、ある程度の年月って具体的にどれくらいなんですか?」

「世界によってそれぞれ違う。まぁ、今の君に寿命はないから死ぬまで開かないということはないとだけ言っておこう。」

ぼ、僕って寿命なくなってたんだ・・・。

「わ、分かりました。それじゃ、行こうか。」

そして、僕と母さん、初号機、そしてゴウラムは最初の世界に行くため、ゲートをくぐった。

続く

シンジ、説明す（ついでに童貞卒業!!）★

「ここ・・・どこ?」

シンジ達がゲートを潜り抜けてたどり着いた先は、広い空間の真ん中に幾何学模様に光る立方体が安置された部屋だった。

新世紀エヴァンゲリオン
≪神の後継者の異世界記≫
ｃｏｌｒｅｏｎｉｓ作
第１話

僕たちは手分けして何かないのかを探したが、用途の分からない機械と光る立方体以外には何もなかった。
ちなみに、ここに来た時に裸のままだった母さんと初号機のためにＴシャツとブラウ

ス、ロングスカートと靴を作って着てもらっている。
さすがに下着まで作るのは気が引けてしまった。
だから二人とも今はノーパン・ノーブラ状態だ。
「はぁ、ここは一体どこなんだ?人の通れる通路もないみたいだし。」
「シンジ、後はその光る立方体だけだし、先に調べてみてから次を考えましょ?」
「そうですよ、マスター。どうやらここは吹き抜け構造になっているようですし、それを調べ終えたら上に向かってみましょう。」
「そうだね、母さん、初号機。」
母さんと初号機の言うことに納得した僕は、後回しにしていた立方体を調べるために手で直に触れた。
「な、何だ?!」
「シンジ（マスター）?!」
触れた立方体が突如その光を増し、目を開けていられなくなる。
突然のことに立方体に触れていないほうの手で目をかばうが、それでも辛いほどの光量だ。
この現象に驚いた母さんと初号機が僕を立方体から離そうと僕に触れた次の瞬間、立方体に触れている手から何かが体の中に侵食してきた。

「っく!!」
「うぁ?!」
「い、いやぁ!!」
その何かは僕に触れている母さんと初号機にも侵食しているようだ。
僕はその何かに対抗するためにイロウルの力を発動させようとした瞬間、侵食は止まった。
「な、何だったの、今の?」
「マスター。マスターのステータス能力で何かわかりませんか?」
「うん、確認してみるよ。」
初号機に言われるまで忘れていたステータス能力を発動し、現在の僕のステータスを確認してみる。
「う～ん、何かされる前の状態を見てなかったから、何がどう変わったのか・・・あれ?」
「どうかなされましたか?」
ステータス画面には僕の身体数値（身長とか筋力とかアソコ（・・・）のサイズとか）の他に気とか魔力とかのゲームで馴染みのあるやつ、そして使用可能な能力の一覧があった。
その使用可能な能力の中に、僕が全く知らないものが2つほどあった。

「どうやら、さっきのは僕たちに『ＩＦＳ』っていうのと『ボソンジャンプ』っていう能力を追加させたみたいだよ。」
「・・・ＩＦＳ?」
「・・・ボソンジャンプ?」
ステータス能力で詳細が確認できたから、母さんと初号機にその内容を伝える。
でも、どっちも使徒の能力で再現可能だったから、僕にはあまり意味はなかったかな。
「・・・ナノマシンが存在するなんて、この世界の科学技術は随分と進んでいるみたいね。」
「・・・ボソンジャンプについては動作原理が私たちの世界の科学技術だけでは到底理解不能な技術ですし。」
以上が、説明を聞いた母さんと初号機の感想でした。
それはさておき、いい加減にここから出ようかと母さんと初号機を抱えてゴウラムと一緒に飛んで行こうとした時、急に立方体の前に光が集まりだしたかと思ったら、４つの人が現れた。４人とも気を失っているのか動く気配がない。
「・・・」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・・・もしかして、今のがボソンジャンプかしら?」
一番先に我に返ったのは科学者だった母さんだ。

それから僕たちは４人の人達に近づいていき、イロウルの能力を使って状態を確認した。

まず１人目は綾波みたいな蒼銀の髪をした１７、８歳の女の子。

体に数種類のナノマシンを入れているけれど、単に気を失っているだけで問題はなさそうだ。

２人目は珍しいピンク色の髪をした１４、５歳くらいの女の子

この子もさっきの子と同じだ。ただ、ナノマシンの量はこっちのこの方が多いみたいだけど。

３人目は金髪の３０代前半くらいの女性。

ナノマシンは２、３種類くらいしかないけど、かなり疲労しているみたいだ。それ以外に別状はない。

そして４人目の全身黒づくめで黒のバイザーをした茶髪の男性。

見た目はかなり怪しいけれど、状態を調べた時にその理由もわかった。

この人はかなりまずい状況だ。

１人目や２人目の女の子なんか比べ物にならないくらいに大量のナノマシンが存在し、脳にも影響が出ている。この格好はそれを少しでも改善できるような機能を持っている。

４人の状態確認が終わった僕は、４人を起こすことにした。
幸い全員すぐに起きてくれたけれど、かなり警戒されてしまった。
まぁ、それもすぐにある程度まで改善されたけれど。

「さて、とりあえずは自己紹介しましょうか。僕は碇シンジ。かなり特殊な能力を持った・・・超人？・・・化け物？・・・・・・・まぁ、そういった存在です。」
「「・・・・・・は？」」
「・・・面白いわね。」
まぁ、信じてもらえるわけがないと思ってサードインパクトの時に現れた初号機の羽と同じものを展開したら、３人は目が点になって、１人は目がキラキラしだした。
うん、きっとこの人はリツコさんと同じマッドサイエンティストだ。
「私は碇ユイです。一応シンジの母親でただの人間よ。」
「「「・・・・・・え？」」」
うん、まぁ、そういう反応するよね。母親はただの人間で、子供はとんでもない存在って言われたらね。
「私はマスターが搭乗していたエヴァ・・・わかりやすく言えばロボットだった、初号機

といいます。」
「「「・・・・・・・・・・・・・・」」」
あはは、４人ともう言葉すら出なくなっちゃったよ。
まぁ、ここまで驚きの連続だったのに、最後の１人が元ロボットなんて言われたらねぇ。
まだまだ驚くことは残っているんだけど、大丈夫かな？
「そして、こいつはゴウラム。僕の相棒みたいな存在だよ。あと、僕たち全員、こことは違う世界から来たんだ。」
「「「・・・・・・・・・・・・・・・・えぇ?!」」」
何とか僕の言ったことを理解したのか、本日最大級の驚きようだ。
まぁ、それなりに証拠も出したしねぇ。僕の羽とか、初号機とか、ゴウラムとか。
そして、今度はむこうの自己紹介だ。
「俺はテンカワ　アキト。テロリストだ。」
「「よろしく（ね）。」」
「・・・・・・」
黒づくめの男性のテロリスト発言。そんなもの、だからどうしたという感じで全員スルー。

そのことに驚いているようだけど、どうでもいいことだからね。
「私はホシノ　ルリです。宇宙連合軍で少佐をしています。」
「「よろしく（ね）。」」
軍人さんだったんだね、この子。テロリストが横にいるのに、何もしないっていうことはやっぱりテンカワさんにはそれなりの事情があって、ホシノさんはそれを知っているってことか。
「・・・ラピス・・・ラピス　ラズリ」
「「よろしく。」」
「・・・よろしく。」
ちょっと恥ずかしそうにしているラピスちゃん。
頬を赤くして、もじもじしてて、結構かわいい。
「私はイネス　フレサンジュ。ネルガルの科学者よ。」
「「よろしく（ね）。」」
やっぱりマッドだ、この人。
・・・まぁ、それはおいといて。
自己紹介が終わった僕たちは現状の確認をしていく。
テンカワさんたちはボソンジャンプの事故によってここに来たみたいだ。

僕たちがあの立方体――ボソンジャンプの演算装置にふれてＩＦＳとボソンジャンプ能力を手に入れたことを話したら、全員驚いていた。約１名はかなり興奮していたけど。

ここにいてもどうしようもないので、演算装置にイロウルの能力で僕の細胞の一部を取り付け、何かあったらすぐにわかるようにしてから地球のネルガル本社の会長室へボソンジャンプすることにした。（ボソンジャンプに必要なイメージをアラエルの能力を使ってテンカワさんからもらったけど。）

―ネルガル本社　会長室―

「・・・はぁ、一体どこにいるんだい、テンカワ君。」

ボソンジャンプして最初に目に入ったのは、立派なデスクに突っ伏している男性の姿だった。

「・・・俺がどうかしたか、アカツキ？」

テンカワさんが声をかけた瞬間、カバッと身を起こしたアカツキと呼ばれだ男性は、テンカワさんたちを見た瞬間に勢いよく立ちあがった。

「テンカワ君!!　それに、ルリ君にラピス君、イネス君も!!」

その後、落ち着いたアカツキさんと自己紹介した（テンカワさんたち同様にかなり驚

いていた）後、アカツキさんから現在の状況を聞くことになった。
今は西暦２１９０年。テンカワさんたちがいたのは西暦２２００年。１０年も前の世界に戻ってきたらしい。
アカツキさんは精神だけこの世界に戻っていたらしく、気がついて現状を認識してからテンカワさんたちをずっと探していたらしい。
それと、この時代のテンカワさんたちは別に存在しているとのこと。
「それで、これからどうするんだい、テンカワ君？」
「・・・俺に残された時間は少ない。エステのテストパイロットすらもうできないだろう。」
「あ、忘れてました。テンカワさんの治療ならできますよ。」
「「「「・・・・・・はぁ?!（えぇ?!）」」」」
いやぁ、いけない、いけない。あの場所じゃぁ落ち着かないし、もう少しゆっくりできる場所に移動してから話そうと思ったんだけど、それどころじゃなかったしなぁ。
「・・・本当に治るのか？」
「それはもちろん。ただ、リスクはいくつかありますけれど。」
僕は治療方法とそのリスクを説明した。
治療方法は簡単。僕のイロウルの能力を使ってナノマシンを無力化もしくは有効な

ものに書き換えるのだ。
リスクは４つ。
1、▪無効化したナノマシンの除去には時間がかかる。
2、▪有効化したナノマシンの効果がどれ位なのかが分からない。
3、▪五感の回復に時間がかかる。
4、▪僕の細胞を取り込んでもらうために髪の色が変化するなど、体が変化する可能性がある。
「・・・まぁ、こんなところかな。それでも良いなら早速始めるけれど?」
「・・・・・・・お願いしよう。」
よし、じゃぁさっさと始めよう。
ソファに横になったテンカワさんの額に手を当て、イロウルの能力を発動する。
えぇっと、テンカワさんの中のナノマシンの効果はっと・・・。
まずは・・・ボソンジャンプ用ナノマシン・・・治療対象外。
次・・・ＩＦＳ用ナノマシン・・・これも対象外っと。
次・・・解毒用ナノマシン・・・これも良し。
次・・・有機物分解用ナノマシン・・・無効化・・・完了。
次・・・・・・・・・・・・・・・

そうやってナノマシンの選別と有害ナノマシンの処理を行っていき、全ての処理が完了した。

「・・・ふぅ、終わりました。後は経過を観察していくだけですね。」

「まさか、もう終わったというの？　まだ1分も経っていないというのに・・・。」

テンカワさんが起き上がって、体の調子を確かめるように何度も両手を握っては開いて、握っては開いて・・・と繰り返している。

「どうですか、テンカワさん？　どこかおかしな所とかありますか？」

「・・・いや、むしろ良すぎて怖いくらいだ。既に触覚がある程度戻っているようだ。」

「「・・・よかった・・・。」」

さて、テンカワさんの治療も終わったことだし、そろそろ交渉を始めようか。

「アカツキさん、物は相談なんですけれど。」

「・・・なんだい、僕にできることなら何でも協力させてもらうよ。」

「なら、僕たちに会社設立のための資金・人材援助をお願いしたいんですけど。」

僕は立ち上げたい会社の内容を説明していく。

会社名はＥＶＥＲ（エヴァー）。事業内容は人工知能搭載型ペットロボットの製作・販売だ。オモイカネやＭＡＧＩほどの能力はいらないけど、それでも両者の機能の一部だ

けでも限りなく本物に近いペットロボットが出来上がるはずだ。地球だとそれほど売り上げは期待できないけど、火星ならそれなりに利益を得られるはずだ。
「・・・う～む、ペットロボットか・・・考えたこともなかったな。」
「確かに、地球では本物のペットも簡単に手に入りますけど、火星では難しいですよね。」
「あぁ、火星でペットを飼っている家は皆無に近かったな。」
「・・・ペットロボットによるアニマルセラピー・・・効果は期待できそうね。」
　意外に好反応。
　もうちょっと渋られるかと思ったんだけどね。
「・・・よし、僕の権限で新会社を設立させよう。それを君たち3人とテンカワ君たち4人の計7人で運営してもらう。代わりに、6年後には君たち全員にナデシコに乗ってもらうからね。」
「ええ、それで構いません。」
「よし、それじゃぁ早速。」
　まずは僕たち7人の戸籍をホシノさんが偽造してくれた。
　全員が同じホーム出身で、ホームが閉鎖されるために未成年のラピスちゃんをテンカワさんが引き取ったという設定だ。
　それからプロスさんという人と一緒に会社設立の手続きを済ませて、僕たちはアカツ

キさんが手配してくれたホテルに泊まった。
僕と母さんと初号機――改め、マリアで1部屋。
テンカワさんとラピスちゃんで1部屋。
そしてイネスさんとホシノさんで1部屋という割り当てだ。
部屋のソファに座った僕は、母さんたちがシャワーを浴びている間にステータス能力で、現在の僕の能力確認とステータス変更を行うことにした。
ちなみに、変更前の僕のステータスは以下の通りだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊
名前：碇　シンジ
性別：男
身長：１７０ｃｍ
体重：５５Ｋｇ
《ステータス》
・筋力：２０　／　∞（リミッター使用中　Ｍａｘ：２００）

・体力：１０　／　∞（リミッター使用中Ｍａｘ：２００）
・素早さ：１５　／　∞（リミッター使用中Ｍａｘ：２００）
・知能：１，０００　／　∞
・魅力：１０　／　∞
・運：２　／　∞（リミッター使用中Ｍａｘ：１，０００）
・操縦技能：５　／　∞
・気：０　／　∞
・魔力：０　／　∞
・物欲：１０　／　∞
・性欲：３　／　∞
・睡眠欲：５　／　∞
・黄金律：１　／　∞

《アビリティ》

・ＡＴフィールド
・全使徒能力
・ＩＦＳ
・ボソンジャンプ

・変身（クウガ）
・自己ステータス操作
・創造（制限有）
・眷属化
《オプション》
・陰茎長：１２ｃｍ
・陰茎幅：３ｃｍ
・亀頭幅：３．５ｃｍ
・カリ高：３ｍｍ
・精液製造：１／∞
・精液貯蔵：３／∞
・射精量：５ｍｌ／∞
・性技：１／∞
・身体変化：オフ
・絶倫：オフ
・精液特効：オフ
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊

ちょっと待とうか。

僕のステータス低?!　それに変な項目まであるし?!　特にオプション!!

まぁ、とりあえず弄ろうか。

　＊＊

名前：碇　シンジ

性別：男

身長：１８０ｃｍ

体重：７０Ｋｇ

《ステータス》

・筋力：４０　／　∞（リミッター使用中　Ｍａｘ：∞）

・体力：１，０００　／　∞（リミッター使用中Ｍａｘ：∞）

・素早さ：６０　／　∞（リミッター使用中Ｍａｘ：∞）
・知能：１００，０００　／　∞
・魅力：１００　／　∞
・運：１０　／　∞（リミッター使用中Ｍａｘ：１，０００）
・操縦技能：５０　／　∞
・気：２００　／　∞（リミッター使用中Ｍａｘ：∞）
・魔力：５００　／　∞（リミッター使用中Ｍａｘ：∞）
・物欲：２０　／　∞
・性欲：３０　／　∞
・睡眠欲：１０　／　∞
・黄金律：１００　／　∞（リミッター使用中Ｍａｘ：１，０００）

《アビリティ》
・ＡＴフィールド
・全使徒能力
・ＩＦＳ
・ボソンジャンプ
・変身（クウガ）

・自己ステータス操作
・創造（制限有）
・眷属化
※新しいアビリティが解放されました。
・気闘術
・魔術
・魔法
・咸卦法
《オプション》
・陰茎長：２０ｃｍ
・陰茎幅：５ｃｍ
・亀頭幅：６ｃｍ
・カリ高：１ｃｍ
・精液製造：∞　／　∞
・精液貯蔵：∞　／　∞
・射精量：５００ｍｌ　／　∞
・性技：５０，０００　／　∞

・身体変化：オン
・絶倫：オン
・精液特効：オン

****

とりあえずはこんなものかな。
体が設定したステータスに合うように成長した。身長だけでなく、筋肉も相応にだ。ステータスはゲーム感覚で増やし、リミッターで調整してみた。知識だけは例外だけど。
新しいアビリティについては明日以降で確認すれば良いし。
オプションについては・・・ぼ、僕だって男なんだよ?!　文句ある?!
「シンジ、お風呂空いたわよ。」
「わかった。すぐに入るよ。」
「ええ、そうしな・・・・・・・。」
「・・・?」

母さんに言われてステータス画面を閉じながら立ったんだけど、母さんの言葉が途中で切れた。
不審に思った僕は、母さんの方を見た。
母さんはバスローブを羽織っただけの格好で手にバスタオルを持っているけれど、動きが完全に止まっていた。
「・・・かあさん?」
僕は母さんに声をかけるが、僕自身も母さんの格好にモヤモヤ・・・いや、欲情していた。
僕は自分の欲望をできるだけ抑えながら母さんに近づく。
「はぁ・・・はぁ・・・し、しんじ・・・」
母さんに近づいて分かったけど、母さんも欲情している。
頬は朱に染まって、息遣いもかなり荒い。
僕は落ち着かせようと、母さんの頬に手を当てた。
けど、それが間違いだった。
「シンジ!!」
「んむ?!」
母さんは理性の箍が外れ、獣のように僕の唇を貪る。

「ん・・・んぅ・・・ちゅっ・・・ぅん」
舌が侵入してくる頃には、僕も我慢の限界だった。
「ん・・・ぢゅっ・・・れぅ・・・」
「ん・・・んんっ・・・ちゅっ・・・」
今度は逆に僕が母さんの口内を蹂躙しながら、母さんを抱き上げてベッドへと運ぶ。
母さんをベッドに寝かせ、バスローブを引きちぎるように肌蹴させた後、露わになった母さんの胸を両手で揉みしだく。
「あぁん・・・いい・・・も、もっと・・・もっと強くして!!」
僕は母さんの要望通りに揉みしだく手に力を籠め、最後はビンビンに勃起した両乳首を思い切り引っ張りながら抓る。
「あああぁぁぁぁぁ!!　イクッ!!　おっぱいだけでイッちゃうぅ!!」
その瞬間、母さんは大声を上げ、触れてもいないアソコから盛大に潮を吹きながら絶頂した。
乳首を離したら、母さんはベッドに背を預けたままピクピク痙攣していた。
「気持ちよかったかい、母さん?」
「・・・・・・ええ、とっても・・・」
「じゃぁ・・・」

絶頂の余韻に浸っていた母さんに感想を訊ねると、上気した顔で妖艶な笑みを浮かべながら返答した母さんに、僕はズボンと下着を脱いで、完全勃起した肉棒を母さんの顔の前に突きつける。

「僕の肉棒（これ）も気持ちよくしてよ。」

「・・・あぁ・・・はぃ・・・。」

母さんは僕の肉棒を見てうっとりした顔をした後、僕の肉棒に舌を絡ませる。

「ん・・・ちゅっ・・・れぅ・・・ちゅっ・・・はむ」

肉棒を唾液まみれにした母さんはそのまま口に含もうとしたが、僕の肉棒が大きすぎて亀頭を咥えるだけで精一杯みたいだ。

「ん・・・んぅ・・・ん・・・ん・・・ん・・・」

それでも懸命にフェラをしていた母さんは肉棒から口を離し、胸で挟もうとする。

しかし、今の僕の肉棒は母さんの胸で包むことはできなかった。

「ん・・ごめんなさいね、シンジ。ちゃんとパイずりしてあげられなくて。母さん、おっぱい大きくないから・・・。」

母さんが少し悲しそうに言う。

小さければ、大きくすれば良い。

「だったら、僕が大きくしてあげる。」

「・・・えっ？」

僕は両手に中身が満たされた巨大な注射器を創造した。

針は細いが、その容量は２００ｍｌと、実在の注射器ではありえないものだ。

浣腸器に注射針を取り付けたような物と言えば、想像しやすいと思う。

それを見て顔を引きつらせる母さんを無視して、僕は母さんの両乳首に注射針を刺し、中身の注入を開始した。

「い、いやああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ!!　ぬ、抜いてぇぇぇぇぇ!!」

「まだ全然入ってないよ、母さん。」

母さんの懇願を拒否して注入を続ける。

「あ、あああ熱いいいい!!　お、おっぱいが・・・おっぱいが熱いのぉぉぉ!!」

注射器の中身が１／５くらい注入が終わった時、母さんの胸に変化が現れた。

乳首が肥大化し、ペットボトルのキャップくらいの大きさになった。そして、胸そのものが膨らみ始める。

「・・・ぁ・・・・・・ぅぁ・・・」

全て注入が終わった後も膨らみ続けた母さんの胸は、僕の肉棒をすべて包み隠してしまうほどの大きさになった。

母さんに投与した薬の効果は豊胸以外にもいくつかある。

僕は意識が朦朧としている母さんの胸を掴み、上下に揺すって肉棒を扱く。
「あっ・・・んやっ・・・あぁん!!」
胸が揺れる度に先程より大きな嬌声を上げ続ける母さんは、限界が来たのか体を強張らせ・・・
「あああああああああああああああ!!　出る!!　おっぱいから何か出るぅ!!」
その肥大化した乳首から母乳を吹き出しながら、盛大に絶頂した。
僕は右乳首を口に含んで噴出される母乳を押下し、左乳首を右手で扱きながら、母さんがある程度落ち着くまで待っていた。
「・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・し・・・シンジ・・・わ、私のおっぱいに何をしたの?」
母さんは今も乳首から垂れている母乳を見ながら、問い詰めてくる。
「そんなに怒らないでよ。ただ母さんの胸と乳首を大きくして感度を上げたのと、母乳が出るようにしただけだよ。」
僕は母さんの胸の間から肉棒を抜いて、母さんの膣口に亀頭を擦り付けながら先程の薬の効果を教える。
「そ、そう。」
教えた薬の効果にどこかホッとしたような母さん。ただし、薬の効果はまだある。

「・・・あとね、母さんの母乳に媚薬効果を持たせて、母乳がたまった分だけ母さんにも飲んだ時と同じ効果があるよ。」
「なっ・・・あああぁぁぁ!!」
　母さんの耳元で残りの効果を囁いて、母さんが驚きの声を上げると同時に肉棒を母さんに一気に挿入する。
「うぁ・・・ぁ・・・」
　母さんの中は2度の絶頂によって愛液でぐちょぐちょになっていた。
　襞が僕の肉棒を奥へ奥へと誘うようにうねっていて、とても気持ちいい。
「・・・動くよ。」
「ぁ・・・ま、待って・・・お、お願い・・・」
「だ～め。」
　母さんの懇願を無視して、カリ首が見えそうになる位まで抜いては子宮口を貫かんばかりに突き上げる。
　突き上げる度に僕と母さんの体がぶつかってパン、パン、パンと音がする。
「あん、あっ、やぁ、つ、強いのぉ、お、お願いいい、ゆ、ゆ、っくりぃ!」
「だめだよ、母さん。僕、もう出そうだからね。だから母さんも一緒にね。」
「や、やぁ、こ、壊れるぅ、壊れちゃう!」

今までずっと我慢してたから、もう止まれない。
僕はラストスパートだと腰を振るスピードを上げた。
「ぁあ、も、もうダメ！　イク、イク、またイっちゃう!!」
「ぼ、僕もイクよ！　母さんの中に出すよ!!」
「き、来て！　シンジの精液、私の子宮にちょうだい!!」
僕は最後の一突きと、母さんの子宮目掛けて思い切り腰を突き出した。
その瞬間、僕の亀頭が何度も突き上げられて緩んでいた母さんの子宮口を貫いて子宮の奥壁を突き上げた。
「んぐ、んぁあああああああああああ!!」
「っく!!」
子宮の奥壁を突き上げられた母さんは両足で僕を拘束して、自分の股間に押し付ける。
そして、我慢の限界だった僕も、精液を母さんの子宮内に直接ぶちまけた。
以前の射精は『ドピュ・・・ドピュ・・・』っていう感じだったけど、ステータスを弄った今の射精はそんな生易しいものではなく、『ドピュルルルゥ!!』と勢いも量も段違いだった。
「あああああぁぁ!!　お腹が!!　お腹が裂けるぅ!!」

今の僕の射精量は５００ｍｌ。それだけの量が子宮内に出されているのだ。しかも、僕のカリが丁度栓をする形になって、精液が子宮外に漏れ出さない状態だ。
段々と母さんのお腹が子宮部分だけ膨らんできた。
射精が終わった後の母さんのお腹は妊娠４か月くらいにまで膨らんでいた。
「うぁ・・・ぁ・・・」
母さんは絶頂と、精液特効の能力で僕の精液に与えた媚薬効果によってアヘ顔になってる。
でも、たった一回の射精で満足できなかった僕はステータス画面を開いてある項目を弄ることにした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊
・射精量：１，０００ｍｌ　／　∞
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊

そして全く萎えずに固く勃起したままの肉棒のピストンを再開させた。
「あぅ・・・ぁ・・・ぁぅ・・・」
母さんは意識が無いままだけど、お構いなしに腰を振って、また子宮内に射精した。
「んぎぃぃぃぃぃぃぃ!!」
さっきよりも勢いよく出る精液によって意識が戻った母さんは、勃起乳首から大量の母乳を吹き出しながら快感と子宮が膨らむ圧迫感とで大声を上げた。
「も、もう無理!!　入らない!!　入らないの!!」
どんどんどんどん膨らむ母さんのお腹は、射精が終わるころには臨月の妊婦並みになっていた。
「あぁ、シンジぃ。」
射精中は喚いていた母さんだったけど、今はうっとりとした顔をしている。
ただ、これ以上続けるのは母さんの体の負担が大き過ぎると思った僕は、子宮に勃起したままの肉棒を刺して栓をしたまま風呂場へと歩いていき、バスタブの中で肉棒を抜いた。
「あああああぁぁぁ!!」
その時の快感でまたも絶頂した母さんは、乳首から母乳を、子宮から僕の精液を吹き

出し続けた。

続く

シンジ、原因追及す★

シンジがユイとことにおよぶ3時間前のこと。
ホテルの部屋についたシンジたちは、マリアが最初に風呂に入るためにバスルームへ、ユイはその間の暇つぶしにとＴＶを眺め、シンジはソファーに座って栄養ドリンクのようなものを創ってはテーブルに置いてを繰り返していた。

新世紀エヴァンゲリオン
≪神の後継者の異世界記≫
ｃｏｌｒｅｏｎｉｓ作
第２話

Ｓｉｄｅ　シンジ
僕はテンカワさんとイネスさん用に薬を創っている。見た目は栄養ドリンクそのものだけど。

テンカワさん用のものは五感回復と不要なナノマシンの排除用に、イロウル状態の僕の細胞が混じっている。それ以外は高濃度の栄養ドリンクとしか言いようがない代物だけど。

そして、イネスさん用のものは若返り薬だ。

「お風呂空きましたよ、マスター、ユイさん。」

「・・・母さん、先に入ってきなよ。僕はまだやることがあるから。」

「分かったわ。」

テンカワさん用の薬を創っている途中だった僕は、母さんに先に入るように勧め、母さんはお風呂に入りにバスルームに移動した。

「何を創っておられるのですか、マスター?」

僕が創り続けている薬に興味を持ったマリアが、対面のソファーに腰かけて質問してきた。

「テンカワさん用のナノマシン除去薬と、イネスさんへのプレゼントだよ。・・・丁度良かった。すまないけど、これをテンカワさんとイネスさんに渡してきてくれない?」

「畏まりました。」

僕はテンカワさん用の薬1ヶ月分を袋に詰め、効果と用法を書いた紙をその上に乗せて、イネスさん用の薬1瓶と一緒に手渡した。

「・・・あぁ、それと、イネスさんの奴は即効性だから飲んだ途端に睡眠状態になって若返りが始まるから。2時間位で若返りが終わって目を覚ますはずだから、その後でイネスさんを部屋に連れてきてくれないかな？」
「畏まりました。」
マリアは僕が渡した薬を持って、部屋を出て行った。
手持無沙汰になった僕は、自分のステータスの確認と調整をしながら時間をつぶすことにして、ステータス画面を呼び出した。

――現在――

母さんの子宮から僕の精液が出なくなったのを確認して、情事で汚れてしまった僕と母さんの体をシャワーで落としていく。
そして、粗方落とし終わった頃に、母さんが目を覚ました。
「・・・ん・・・んぁ・・・しんじ？」
まだぐったりしている母さんは、僕に背を預けた体制のまま段々と頬を紅くしていき、目も潤んでいく。

「あぁ・・・シンジ・・・ステータスを弄ったでしょ？　あなたを見ていると体が疼いてしょうがないわ。」

もしかして、魅力の項目の効果かな？

そう思った僕は魅力の項目にリミッターをかけた。

＊＊

※新しいアビリティが解放されました。

・射精コントロール

・魅力：２０　／　∞（リミッター使用中Ｍａｘ：１００）

・射精コントロール：オン

＊＊

「ん・・・はぁ・・・」

その途端に母さんの目に理性が戻り始め、頬の紅みも薄れていく。
「・・・ゴメン、母さん。魅力の項目を上げ過ぎてたみたいだ。」
「良いのよ、シンジ。・・・それに、母親なのに、あなたに抱かれて嬉しいと感じている私がいるの。」
「・・・ありがとう。」
お風呂から上がった僕たちは、ベッドの後始末をしようと部屋に戻った時、イネスさんを連れて部屋に戻ってきたマリアと鉢合わせしてしまった。
「マ、マリア・・・」
「・・・マスター・・・ユイさん・・・・・・」
「・・・・・・・」
沈黙が痛い。
マリアが出ていくまでと全く違う、大きな胸。
大きくなり過ぎて、勃起していなくても形が丸分かりな乳首。
一緒にお風呂に入っていたのが丸分かりの状況・・・間違いなくバレた。
な、なんて言われるのか、かなりビクビクだ。
「マ、マリア・・・あの（ね）・・・」
「・・・私だけ仲間外れは寂しいです、マスター・・・」

「・・・・・・へ？」

マリアの予想外の反応に、気の抜けた声を上げてしまった僕たちを、誰が責められるだろう。

そして、そんな僕たちの顔が面白いのか、さっきから笑い続けている人が一人・・・。

「・・・何が面白いんですか、イネスさん？」

「フフフ・・ごめんなさいね、シンジ君。そういう好意に鈍感なところはアキト君と変わらないのかと思ったら、いろいろと考えてた自分が馬鹿みたいに思えてね。」

マリアの背後から全てを見ていたイネスさんは、未だに笑い続けている。

一頻り笑ったイネスさんが落ち着いた後に、全員でソファーに腰かけた僕たちは、マリアとイネスさんに状況の説明を行った。

ちなみに席順は、僕の隣に母さん、テーブルを挟んだ対面はマリア、その隣にイネスさんという並びだ。

「・・・つまり、シンジ君の能力であるステータス能力でアップしたシンジ君の魅力に、ユイさんが耐えられなくなって襲い掛かったということね？」

「・・・しかも、胸まで大きくしてもらって・・・羨ましいです。」

「・・・確かに・・・。」

「・・・うううっ!!」

マリアとイネスさんに羨望の眼差しを向けられた母さんは、向けられた先の胸を腕で隠そうとするが、大きくなった胸は隠すことは出来ず、逆に強調する結果となった。
「・・・マスター、私もユイさんみたいに・・・」
「・・・シンジ君、ユイさんを堕とした『魅力』の効果を調べさせて!!」
「はぁ・・・わかりましたよ・・・どうなっても知りませんよ?」
マリアとイネスさんの勢いがすごく、断ってもまた同じことが繰り返されるだけだと思った僕は、『魅力』のリミッターを外した。
「・・・ますたぁ・・・」
「・・・こ、これはすごいわね・・・」
目がトロンとしてきて、頬が赤く染まっていくのを見た僕は、これはまずいと思ってリミッターをかけなおそうとした僕の手を、横から伸びてきた手が止めた。
「・・・駄目よ、シンジ・・・ちゃんと私たちを抱いてくれなきゃ・・・」
「ちょっ、母さん?!」
母さんの手をほどこうとしたが、時すでに遅く、テーブルを回ってきたマリアとイネスさんにのしかかられてしまった。
「「シンジ（君／マスター）・・・抱いて（ちょうだい／ください）。」」

続く

《登場人物設定》

○碇　シンジ

身長：１７０ｃｍ　⇒　１８０ｃｍ

体重：５５Ｋｇ　⇒　７０Ｋｇ

年齢：１１６歳

本作の主人公。

サードインパクトとその後のＬＣＬの海を漂っていた影響で、魂の階梯を駆け上がっていった元人間の神様。

創造神の後継者に指名されたため、様々な世界に行って経験を積まなければならなくなった。（簡単に言えば、神様修行）

元々持っていた使徒の能力の他に、旅立つ前に手に入れたアークルと、創造神にもらった能力で完全な規格外チート存在になった。

ステータスの設定ミスで母親である碇　ユイとセックスをしてしまったが、両者ともそれ程気にしていない。

―保有能力―

・ＡＴフィールド

全ての使徒共通の能力。拒絶の心を具現化して物質や事象など、様々なものを遮る壁のようなもの。

・全使徒能力

第１使徒アダムから第１８使徒リリンまでの全ての能力が使える。

詳細は作中または、後日正式投稿する（かもしれない）設定集にて。

・ＩＦＳ（イメージ・フィードバック・システム）

ＩＦＳコンソールというＩＦＳ所持者専用の入力機器によって、意思のみでの入力が可能な入力システムのこと。火星の極冠遺跡にある演算装置に接触した際に遺跡からナノマシン処理を受けたために、マシンチャイルドである星野ルリやラピス・ラズリ以上の処理能力を有している。

・ボソンジャンプ

火星の極冠遺跡にある演算装置とチューリップクリスタル（ＣＣ）を用いた時空間移動技術のこと。ただし、シンジたちは演算装置に接触した際に遺跡からナノマシン処理を受けたために、ジャンプの際にＣＣを必要としないＳ級ジャンパーである。

・変身（クウガ）

創造神の指示により、世界を渡る前に手に入れたベルト―アークル―によって古代の戦士『クウガ』への変身ができる。

・自己ステータス操作

自分に関する事柄をＲＰＧのようなステータス画面にて確認・パラメータ変更ができる能力。

一度上げたパラメータをそれ以下の数値に再設定すると、リミッターがかけられる。

・創造（制限有）

自分が想像したものを創造できる能力。

ただし、現在のシンジに創造できるものは無機物と、エヴァ関連のものに限られている。

・眷属化

人間、動物、幻獣など種族を問わず自分の眷属とすることができる。

その際に、眷属の寿命はシンジが滅するまでとなる。

・身体変化

身体を質量などを無視して、別のものに変化させることができる。

例：腕　⇒　触手

・精液特効

自分の精液に特殊な効果を持たせることができる。
媚薬や麻酔、避妊など、種類や付与する効果の数まで任意に変更できる。
・射精コントロール
自分の意思ひとつで射精することができる能力。これがあれば永遠に射精し続けることも、相手が死ぬまで射精せずに犯すことも自由自在。

○碇　ユイ
身長：１６０ｃｍ
体重：５０Ｋｇ　⇒　７０Ｋｇ
年齢：２６歳（エヴァに取り込まれた当時のまま）
スリーサイズ：８２　／　６０　／　８４　⇒　１３０　／　６０　／　８８
シンジの実の母親にして最初のＳＥＸ相手。
母親としても、一人の女としてもシンジを愛している。
シンジが大きくした胸に対しては、シンジ好みの体にしてもらっただけと好意的に受け止めている。また、母乳についてはシンジの許可なく絞る気は一切ない。
―保有能力―
・ＡＴフィールド

身体はマリアの体をコピーしたもののため、使用できる。ただし、シンジやマリアのものとは比べ物にならないくらいに弱い。

・ＩＦＳ　／　ボソンジャンプ

シンジと同様のため、説明省略。

・媚薬母乳

シンジに注入された薬によって、妊娠していないのに母乳が出る体質になってしまった。

その母乳は強力な媚薬であり、１滴でも飲んでしまうと体が疼きだしてしまう程である。

また、胸に溜まった母乳はユイにもその効果を及ぼす。

○碇　マリア

身長：１７５ｃｍ

体重：５２Ｋｇ

年齢：１１４歳

スリーサイズ：８８　／　５８　／　８９

シンジの愛機だったエヴァ初号機が人間に再構築された存在。

搭乗者だったシンジをマスターと呼び慕っている。
また、シンジを一人の女として愛しており、シンジの命令ならばどんなことでも行うつもりである。
―保有能力―
・ＡＴフィールド
シンジのものとは比べ物にならないくらいに弱いが、元がエヴァであること、命の実たるＳ２機関を取り込んでいたこと、サードインパクトの依代にされていたこと。この３つの要因によって第１使徒アダムと同等の強度を誇る。
・ＩＦＳ　／　ボソンジャンプ
シンジと同様のため、説明省略。

○イネス　フレサンジュ
身長：１７２ｃｍ
体重：５４Ｋｇ
年齢：３４歳　⇒　２０歳
スリーサイズ：８５　／　６０　／　８６
ボソンジャンプの事故により、未来から時間遡行してきた人物の一人。

『説明』という言葉を聞くと、その道のプロでもわからない理論をもって長々と説明を始める変人だが、科学と医学に精通する天才で、ボソンジャンプ研究の第一人者。
シンジにもらった若返り薬によって２０歳まで若返ることに成功した。
また、異世界の神と名乗り、未来でも不可能だった若返り薬を作り出したシンジたちの存在に興味（以上の感情）を抱いている。
―保有能力―
・ボソンジャンプ
ＣＣを使うことによって単独ボソンジャンプができる。
しかし、他人を一人一緒にジャンプさせるのはともかく、戦艦ごとのジャンプは経験がほぼ無いこともあって、苦手としている。

シンジ、調教す（前篇）★

「シンジ・・・」
「マスター・・・」
「シンジ君・・・」
母さんに左腕を、マリアに右腕を抱え込まれ、イネスさんが僕の足の上に座って正面から迫られる。
３方向から柔らかい胸を押し付けられて、正直我慢の限界だったりする。

新世紀エヴァンゲリオン
≪神の後継者の異世界記≫
ｃｏｌｒｅｏｎｉｓ作
第３話
Ｓｉｄｅ　シンジ

「あの・・・みんな離れてくれないかな？」
残り僅かな理性を総動員して、母さんたちに離れてもらうようにお願いしてみる。
「ふふふ・・・イヤよ。さっきよりスゴイことをしてくれるまで、離れてあげないわよ？」
「ユイさんだけずるいです。私の胸も大きくしてください。」
「若返らせてくれたのは感謝してるけど、ユイさんのは反則だわ。だから、私にもしてくれるわよね？」
・・・結果は分かりきっていたことだけど、ここまではっきり言われるとは・・・・・・。
「・・・・・・はぁ、もう。3人共どうなっても知らないからね？」
僕は『身体変化』の能力で両手を触手に変えて3人の両腕と生足に巻きつけ、僕の腕を離させてから両腕を伸ばした十字架に張り付けられた聖人のような状態で宙づりにした。
「「・・・・・・・えっ？」」
拘束された母さんとマリア、そしてイネスさんは僕の両手が触手に変化したのが信じられないみたいだ。まぁ、当たり前だけど。人の体が物理法則を無視して変化して動くなんて想像できないからね。
「まだまだ、こんなもんじゃないよ。」
僕は触手を枝分かれさせて3人の服を脱がせる。破るのは片付けが面倒から、丁寧

に。
露わになった3人の裸体はとても綺麗だった。
僕はしばらく3人の裸体を眺めてから、服を脱がせる時に使った触手12本の形状を変える。
先端は長めの注射針に、その注射針に続く場所は透明なカプセル状にし、触手と繋がっている部分から中に紫色の薬を充填させる。
「さて、3人とも。覚悟してね。」
僕は3人の返答を待たずに触手を3人の乳首とお尻に刺し、薬の注入を開始した。
「「あああああぁぁぁぁぁぁ!!」」
注入を開始した途端に3人から嬌声が上がる。
母さんの時よりも速いペースで注入を続けているため、既にマリアとイネスさんの胸は大きさを増し始めている。母さんの胸に注入している分だけ豊胸効果はないため、量も少ない。
3人のお尻から注入していた薬の効果で、3人とも腰の細さはそのままにお尻だけが大きくなっていく。ただ、お尻はあまり大きいのは好きじゃないから程々にしておく。
注入の終わった母さんの乳首に刺している分と、3人のお尻に刺している分の注射触手を抜き、お尻に刺していた分の片方を元の触手に戻して3人のお尻の穴に挿入する。

「「そ、そこはちがぁぁぁぁぁ!!」」
３人が何か言ってるけど、無視無視。
挿入した触手を膨らませ、抜けないように固定。そして先端から特殊な浣腸液を注入開始だ。
「「いやぁぁぁぁぁ!!」」
３人のお腹が妊婦のように膨れてきたけれど、気にせずに宙吊りで注入を続けたままバスルームへと連れて行く。
「「つく?!・・・ぃぁ・・・ぅぐぅっ!!」」
既に３人とも臨月の妊婦さん以上にお腹が膨れている。
「母さんに僕からのプレゼントだよ。」
僕は無線式の卵型バイブレーターを２つ創り、母さんの両乳首に押し付ける。
「な、何をしているの?」
「見てれば分かるよ。」
乳首から母乳が出始め、バイブレーターを濡らしていく。
ぐいぐいと押し込み続けたバイブレーターの先端が挿入され、母乳で濡れていたためか、つるんとそのまま飲み込まれてしまった。
「いやぁぁぁぁぁぁ!!」

「さて、出てこないように栓をしないとね。」
金属製の２ｃｍ位のボールを２つ創り、右乳首を挟むように持っていくと、ボール同士が動き出して乳首を挟んだ。
「あああああああぁぁぁぁぁ!!」
「反対側もっと」
同じものを創って左側も同様にする。すると、乳首から垂れ流れていた母乳が止まった。
「シ、シンジ・・・母さんのおっぱいに何をしたの？」
「何って・・・乳首の穴の拡張と、母さんの乳首から母乳があふれないようしてるんだよ。」
そんなことをしている内に、３人のお腹が破裂しそうなくらいに膨らんでいる。
僕はお尻の穴に入れている方の触手を元の太さに戻して引き抜いた。
途端に３人のお尻から茶色く濁った浣腸液が噴出してくる。
「だ、だめ!!　シンジ見ちゃダメぇぇ!!」
「あぁぁぁ!!　見ないでください、マスター!!」
「いやぁぁぁぁ!!　み、見ないでぇぇぇ!!」
暫くは浣腸液だけが噴出されていたが、そこに固形物が混じり始める。
びしゃ、べちゃびちゃっと床に撒き散らされる汚物をそのままに、３人のマンコと膣

に触手を挿入し、別の薬を注入する。マンコの方は膣口付近にも薬がいきわたるように大陰唇を覆うように触手を変形させて、無数の棘のような小さな注射針でマンコの外にも注入している。

ちなみに、マンコの中に入っている触手は膣口から１ｃｍのところで止まって、膣壁と子宮全体に薬がいきわたるように３６０。から薬が放出されている。

「あぁぁ!!　も、もうやめてぇ!!」

「ま、マスター!!」

「いやぁぁぁ!!　だめぇぇぇ!!」

この薬は３０ｍｌで十分な効果を発揮するため、注入時間も短くて済む。

注入が終わるころには浣腸液と汚物の噴出も終わっていた。

触手をマンコと臍から離し、シャワーで汚物を流していく。

「さて、これからが本番だよ。」

僕は触手を使ってステータスを弄る。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

・陰茎長：２０ｃｍ　⇒　４０ｃｍ
・陰茎幅：５ｃｍ　⇒　７ｃｍ
・亀頭幅：６ｃｍ　⇒　８ｃｍ
・カリ高：２ｃｍ
・射精量：２，０００ｍｌ　／　∞
＊＊＊

「「「ひっ?!」」」
　さすがにこのサイズには恐怖したのか、３人が息を飲んだ。
「まずは母さんからだ。」
「い、いやぁぁ」
　僕は母さんのマンコを亀頭に宛がうと、根元まで一気に挿入した。
「あああああぁぁぁぁ!!」
　亀頭が子宮口を貫き、子宮の奥壁を押し上げる。
「んぎぃぃいぃい!!」

母さんが悲鳴を上げるが、お構いなしにピストンを始める。
子宮口を抜けて膣口ギリギリまで引いてから、子宮口を貫いて子宮を突き破る勢いで挿入する。
「いぎぃ!!・・・やあぁ!!・・・だめぇ!!・・・あぁん!!」
ピストンを続ける内に、母さんの声がだんだん嬌声に変わっていく。
僕は触手の1本を肉棒と同じ6ｃｍの太さにして母さんのアナルに挿入する。
「あああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
その瞬間に母さんはイったみたいで、全身が痙攣していた。それでもお構いなしにピストンを続け、母さんの子宮と腸の奥に射精した。お仕置きも兼ねて2回分だ。僕の触手の射精量は肉棒と同じ。だからマンコとアナルにそれぞれ4ｌ、計8ｌになる。
母さんのお腹は胸よりも大きく、今にも破裂しそうなほど膨らんでいる。
「あが・・・あぐ・・・ぅぐ・・・ぅぅ・・・・・・・」
僕が肉棒と触手を抜いた途端に、母さんは気絶してしまった。
アナルから精液がこぼれてくるが、マンコからは一滴も落ちてこない。実は2回目の射精の最後の方は豚のようにゼリー状の精液に変更して、子宮口を塞いだんだ。
アナルから精液を垂れ流し続けている母さんを宙吊りのまま僕の背後に動かし、イネスさんを肉棒の上まで動かす。

「次は貴女ですよ、イネスさん。」
「い、いや・・・やめて・・・お願い・・・」
「問答無用・・・です!!」
「んぎぃぃぃぃ!?」
イネスさんのマンコはミミズ千本の名器だ。かなり気持ちいい。
大きくなっていってる胸がすごい勢いで揺れてるけど。
「んぁっ!!・・・ん、んんんっっっ!!　あっっ・・・ぐっっ!!」
イネスさんは母さんと違って、最初から感じていた。だからちょっと調子に乗ってかなり速いペースでピストンしていたら、完全にアヘ顔になって気絶していた。
僕は気絶したイネスさんの子宮に3回分、計61の精液を注ぎ、母さんと同じように栓をして肉棒を抜いた。
「・・・・・・・・・・・・・」
アナルにも射精した母さんと同じくらい膨れ上がったお腹のイネスさんを母さんの横に移動させて、最後のマリアを肉棒の上へ移動させる。
「・・・・・・ますたぁ・・・ま、マリアの処女・・・貰ってください・・・」
「うん、貰うよ。」
僕はマリアのマンコに肉棒を一気に突き刺した。

「あああああああああああああああああああああああああ!!」

僕の肉棒はマリアの処女膜だけでなく、子宮口まで貫いて内臓を押し上げた。

その瞬間、触手から薬が注入され続け、膨らみ続けているマリアの胸から母乳が噴出した。

「もう、駄目じゃないか。折角注入してあげてる薬まで出て行っちゃうよ。」

「も・・・もうしわ・・・け・・・あ、ありま・・・せん・・・・・・あああああぁぁぁ?!」

お仕置きとして、乳首に刺している触手針を太くする。

太くした分、薬の注入速度も胸の増大速度も速くなるけれども、関係なしに注入を続ける。

イネスさんは予定量（母さんと同じ２００ｍｌ）の注入が終わったので、乳首から注射触手を抜いたけれど、マリアはまだ注入を続ける。

「ま、ますたぁ・・・ますたぁぁ。」

イネスさんは元々母さんより大きかったのと、欧米の血を引いているため、母さんよりも大きくなっており、形も大きな風船のようだ。

そして、マリアは既に片側だけでお腹を隠してしまう程の大きさになっている。

その大きく柔らかな胸に体を埋めながらピストンを繰り返していた僕は、マリアのアナルに肉棒の半分ほどの太さの触手を挿入したが、マリアは恍惚とした表情のままだ。

そのまま肉棒と触手を互い違いに動かしていく。
子宮ごと内臓を突き上げ、大腸の奥深くまで犯していく。
「マリア、そろそろ射精（だ）すよ。」
「はい、ますたぁ。まりあの中にいっぱいくださいぃ。」
声までとろけきっているマリアの子宮と腸に連続射精する。
「あはあああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
子宮口と肛門からの逆流を塞ぐようにしながら子宮とアナルにそれぞれ４回分、８ｌずつの計１６ｌを注ぎ込んでいく。
膨らみ続けている胸を押し上げて、今のマリアの胸と同じくらいにまで膨れ上がったお腹に興奮を覚えながら、肉棒と触手をマンコとアナルから引き抜く。
「アナルはこれで栓をしようね。」
僕は直径４ｃｍのアナルプラグを創り、マリアのアナルに挿入して注ぎ込んだ精液が漏れないようにした。

続く